

菊池寛「忠直卿行状記」論考

大西 浩史

菊池寛の「忠直卿行状記」は、大正七年九月号の『中央公論』に発表された。二か月前の同誌七月号に掲載された「無名作家の日記」とあわせ、菊池が文壇での地位を確立した作品となっていることは、周知である。

また、「忠直卿行状記」（以下「忠直卿」と略す）は、大正七年の『斯論』一月号に発表された「暴君の心理」を書き改めたものであることも、知られている。ただ、「暴君の心理」と比べて「忠直卿」は、量的にも題材的にも大幅な改変によって構成が整い、描写のしかたも周到である等、実質はほとんど別の作品に変わっている。 「忠直卿」に対する、出世作としての賞讃は全面的なものではなく、その評価は、作品発表時から高低の評に二分

されていたようだ。のち青野季吉らによって否定面が、さらに戦後、平野謙らによって肯定面が補強されたが、今も基本的なこの両極の軸は変わっていない、といえる。

まず、本間久雄のように肯定的にみる見方がある。彼は「忠直卿が何故に残忍無類の一代の暴君となつたかといふ心理解剖を試みた。而も其心理解剖は近代的解釈の下に於て成功した。」といい、「確かに人間心理の機微を捉へてゐる」とする。長田秀雄も「人間のカン処をびしびし抑へて描いて行く工合が、小気味よく思はれる」という。どちらにも心理解剖の手際よさ、近代的な解釈のしかたが評価される。

一方で、加藤武雄のように「歴史を殺し過ぎてゐる」、「忠直の心理は、少しく歴史を読む者の、暴君なるものゝ解釈の上に常識として有つてゐる概念で、決して新しい発見でも何でもない」

という否定的な評価もある。加藤は、「歴史小説本来の意義」を傷つけていること、解釈が常識的であることを欠点として指摘するのである。

つまり、評価する上でもしない上でも観点は、同じ二つの点である。ひとつは、菊池の心理解釈が「人間の機微」を捉えているか「常識的」であるかという点である。もう一点は、新しい歴史小説とみるか、歴史小説の意義を傷つけんばかりの「歴史離れ」とみるかである。二点とも、相互に関連するのだが、批評家自身が心理解釈・歴史小説をどうとらえているかによって左右される面が大きい。

この文壇出世作ともいうべき作品に注目したい理由として、「暴君の心理」からの飛躍的な発展がみられるにもかかわらず、菊池自身が「私としては自信がなかった。十分書けてゐない気がした。」というような感想を繰り返し洩らしていることが、まづ挙げられる。作者としては自信作はおろか、失敗作への不安をも口にしていたのである。菊池が「十分書けてゐない」と思った真意には、文壇的地位への渴望の裏返しという状況的な要素だけが働いているのではなかっただろう。さらに当時の評論家の中の、高い評価に対して、「世評に対しては全く意外であつた」と発言していることも気にかかる。作品のできに必ずしも満足してはい

ない菊池が、世評を「意外」とする発言の背景には、出来栄えに對する高い評価が意外だつたことだけが存するのではないように思われる。その評の内容と作品の意図とのずれを、菊池が感じていたことによる指摘ではなかっただろうか。このことに関して、菊池は「忠直卿」創作の意図を含めて作品発表時に次のように述べている。

ヒントは世間見ずの現代の貴族の子弟の性格から得たもので、中の事件はまるで考へ出した事で、史実には少しも拠つて居ない。谷崎潤一郎氏はあれを読んで、「題材はよいが、俺なら三百枚に書く。」と云つたと聞いた。私は題目さへ人に伝える事が出来れば好いといふやうな気がする。

テーマさえ人に伝えられればよいとする発言は、従来、菊池の文壇登場の新人としての殊勝な気持ちを表す証左として取り上げられてきた。菊池は、この短篇小説で自分の意図したテーマは伝えられたと満足しているのだろうか。しかし、それだけの意味とすれば、先の同じ文章での「十分書けてゐない」という述懐と矛盾する。この発言は、自らの短篇の着想に満足するものではなく、着想したテーマが読む者に伝わるのならば、短篇で十分だという意ではなかっただろうか。菊池が「忠直卿」で訴えたかった「テーマ」とはそもそも何だったのか、またその出来栄えに不満

を残したことにどのような要因があったのかを確認したい。そこから派生して、批評家の評に異を唱えたい気持ちがあったかどうかを探ることもできるだろうと思われる。

松平忠直の行状自体は、当時講談やさまざまな書で世間に流布しており、「史実には少しも拠つて居ない」現代の小説という菊池の言は、新人としては少々強気なようだが、なぜ菊池が声高にあえてそのような発言をしなければならなかったかを考えてみたい。

『文芸講座』『歴史小説論』⑧の中でも菊池は次のように述べている。

「忠直卿行状記」も、どちらかと云へば、実生活から題材を得た。私は、一人貴族の息子を知つてゐた。周囲の人の阿諛追従に依り、人生に対する正当なる認識を妨げられてゐるこの貴族の息子の存在から、私は「忠直卿行状記」を考へつゝいた。従つて、忠直卿は私のテーマを小説化する道具である。忠直卿でも誰でもよかつたのである。

ここでも「忠直卿」の現代に生きる人物の造型を強調している。しかもテーマについても言及され、不安定な人間関係、人間疎外の実態、疎外感をもつ人間を描こうとしていたことがわかる。

当時、肯定否定いずれにしても、歴史小説として評価されてき

たことを考え合わせたとき、菊池の史実に拠らないという発言の繰り返しは、単なる強がりとも思えなくなる。谷崎に対する先の発言も、テーマが的確に伝わることへの願望があり、同時に発表当初の評に対する菊池の幾らかの不満が込められているとみるべきではないだろうか。現代人として描こうとした菊池の意図が本来のものとするれば、菊池自身ものに述べた意、封建思想の打破をテーマとした新しい歴史小説といった側面や定評となつていく従来のエゴイズムの眼で描いた心理解剖といった性格の作品とは異なる世界があるように思われる。

二

菊池が、発表後強調しているのは、現代に生きる人物としての造型である。忠直や家臣たちの造型がどのようになされ、そこに何を託そうとしたのかを見ていきたい。

話は、大阪城攻めの失態に、家康から忠直卿の家老たちが叱責される場面から始まる。家老たちが忠直に報告するやりとりの中で、忠直の人となり語られる。そして、その忠直と対比させるように、家臣たちの態度が描き出されていく。

国老、本田富正は、家康の「高飛車」の叱責に「口を出す機会

さへなく、「這々の体で本陣を退」く。(本文の引用は『菊池寛全集』第二巻・平成五年十二月・高松市刊に拠った。以下同じ。)しかも、「主君の忠直卿に復命するのに、何う切り出して好いか、悉く当惑」する。ここで、今までの忠直と家臣との関係が明かされていくのであるが、家臣の行動は、「今度の出陣の布令」を言上するにも「家老達は腫れ物に触るやうに恐る／＼御前にまかり出で」ていた、というものである。「今迄にその幼主の意志を、絶対のものにする癖が附いて居た」ために、「大御所の烈しい叱責がどんな効果を及ぼすかを」「恟々として考へねばならぬ」い背景があるのである。

忠直とのやりとりをみると、忠直は、帰ってきた家臣を「直ぐ」「呼び出し」、「機嫌よく微笑をさへ含んで訊」く。平素の行動からは予測されたこの態度に、「家老達は今更の如く狼狽」するのである。「漸く覚悟の臍を決めた」家老の一人も言上するに際しては、「恐る／＼」「色を易へて平伏」する。

家臣としてはあたりまえの行為が描かれていくのであるが、それが菊池の緻密な描写によって示されていくところに、忠直に対応する家臣を客観的にとらえようとする配慮が感じられる。

この時の忠直の反応は、『所詮は、忠直に死ね！と云ふお祖父様の謎ぢや。其方達も死ね！我も死ねぬ！(略)』と叫び、「両手

をぶる／＼と顫はせ」「太刀を二三度、坐りながら打ち振」る「狂的に近い発作」である。しかし、忠直のこうした行動の前に菊池は、冒頭で「二十一になつたばかり」で「僅十三歳で、六十七万石の大封を継がれて以来、今迄此世の中に、自分の意志よりも、もつと強力な意志が存在して居る事を、全く知らない大将」とか、あるいは「生れて以来叱られるなどと云ふ感情を、夢にも経験した事のない」「まだ二十を出たばかり」の主君という説明を予備知識として繰り返し提示している。忠直の幼さ、非難に対する抵抗力のなさをあらかじめ強調することで、忠直の行状は、さほど狂的な行動とも思われなくなっている。

その忠直のふるまいに対して、家老たちは「たゞ疾風の過ぎるのを待つやうに耳を塞いで俯伏して居るばかり」なのである。ここまで、家臣たちの仰々しさは、次第に激しくなっている感がある。家臣を客観的に描くうえでこの緻密さに、読み手が家臣の行為に失笑を買う要素も出てくる面はあるだろう。そこに菊池の作為を読もうとしても、意識的に家臣の行為を大仰なことさから滑稽化しているとはいえないかもしれない。しかし、ここまでの点で菊池が描写する家臣と距離をとろうとしている意識は明らかだろう。一見、忠直の狂的な素行、傲慢ぶりを紹介しているような冒頭部分では、本来至極もつともであるはずの家臣たち

の態度にも菊池の注意は向いている。菊池は、忠直と家臣の造型を分けて描こうとしている。これは、明らかに菊池のとつた手法である。

似たような光景は、大阪城攻めの一番の功に、家康から『日本樊噲』と媚びられた後の、槍術大仕合でも描かれる。

「三間柄の全身の槍をリユウ／＼と扱いて勇氣凜然と出場」する忠直に立ち向かう家臣や見物席の家臣たちの行動である。最初の小姓頭の男は、「兼々忠直卿の猛勇を怖れて居る丈に、槍を合はずか合はさぬかに」「槍を捲き落され」「脾腹の辺を突かれると、悶絶せんばかりに平たばつてしま」う。続く馬廻りの男、お納戸役の男は「一溜りもなく突き伏せられ」る。その後、忠直が、白軍の副将、大島左太夫の胸の急所を突くに至ると、「見物席に居た家中一統は、思ふ存分に喝采」する。ここでは忠直と対決する家臣の狼狽ぶりだけでなく、「家中一統」が君主を讃える盲目的な行動に出る。最後に、大将、小野田右近が忠直の一突きに平伏すると、「見物席の人々は、北の庄の城の崩るゝばかりに喝采」するのである。家臣たちは、全く無邪気に疑いもなく仕えるものとしての行動をとっている。家老たちばかりでなく、末端の家来にいたるまで、つまり家臣全体の主君に仕えるための大仰さが強調される。次々と違う家臣が登場してくるのだが、とる行

動は同じであり、むしろその愚かさが、大仕合の進行に合わせて激しさを増す。しかも「家中一統」の滑稽さまでが、明らかになってくる。副将・大将を負かしたときの忠直の心理は、「得意の絶頂」という言葉の繰り返しだけで、有頂天の気分はかえって抑制されている。このことも、家臣の行動を際立たせるくらい対照的である。ここでの忠直は、「何物をも怖れない」勇猛さが強調されており、乱暴ぶりは影をひそめているのである。

この場面は、滑稽な家臣たちの行動を描き、封建制の中に生きる人々を揶揄するものである。奇異に見えるほどの家臣の行動を描くことで、主従関係の家臣たちの愚かさが浮き彫りになる。大仕合の場面で「家中一統」の行動を表した菊池は、家臣全体を愚行に追いやる封建体制自体の愚かさを見据えていたといえる。

ただ菊池のこの配慮は、あくまで家臣の造型において行なわれていたといえよう。すでに前半部分で、忠直の造型とは異なる筆を認めるからである。この家臣の造型に託された封建社会に仕える者の愚かさの指摘や封建制度自体への批判は、後半場面でより明確になる。家臣二人の噂話を立ち聞きし人間疎外を自覚した忠直が、再度の大仕合以降乱行に及ぶ際の、家臣たちの反応・言動である。

真槍に突かれた二人の家臣、冗談で忠直の機嫌を損ねた小姓、

囲碁での称讃が逆に怒りを買った老家老、女房を奪われた家臣らはすべて切腹する。忠直が「人間」を求めするために呼んだ娘たち、女房たちも、同様に「神の前に捧げられた人身御供」のように身を捨てる。

また、重臣たちは、女房を返さない忠直に対し「人倫の道に悖る所業として」「強諫」はするのだが、その一方で、女房を奪われた家来が割腹したことに對しては、次のような態度を示す。

『遺は武士ぢや、見事な最期ぢや。』と賞めそやす者さへあつた。

主君は絶対の存在である。自分に幾分の非がある場合、例えば真槍に刺された家臣は、「立話が、殿のお耳に入つた為の御成敗」であれば「家来として当然受くべき成敗」である、と解する。主君の権威を傷つけた確証はなくとも、思い当る非があれば、むしろ恥をかかさずに死なせてくれる主君の「好意をさへ感」じながら潔く死んでいくのである。いささかの非がない場合でも、臣下には「死諫」という手段しかない。「潔く」死ぬことが讃えられ、死なない者は、道徳的に「不覚人」となる。女房を奪われた浅水与四郎を「宥め賺す」目附は、

「（略）殿の御非道は、我人共によく判つて居る、が何と申しても相手は主君ぢや。」

といい、家老は、

「（略）主君の御無理は判つて居る事ぢやが、此場合腹をか切つて死諫を進めるのが、臣下としての本分ぢや。（略）か程の不覚人とは思はなかつたに。」

とつぶやく。家臣たちは、主君と臣下との絶対的な身分の相違をわきまえている。主従関係の中で常に絶対服従の非人間的な行動を求められたのだが、家臣にとつては当然の「本分」なのである。菊池は、家臣の同じような割腹を立て続けに描く。しかし、しだいに割腹の理由は、理由にもならない馬鹿らしいものになつていく。遂には、家臣の方が正当であるにもかかわらず、「死諫」というむなし最後の手段となり、最後に、直談判でもっともな意見を訴えながら忠直に歯向かう浅水与四郎が登場する。直談判での『殿！主従の道も人倫の大道よりは、小事で御座るぞ。』という与四郎の吐露は、究極の正論である。しかし決死の覚悟、しかも正当な理由に裏打ちされて飛びかかった与四郎は、「捻ぢ伏せられ」と「匕首を持ったまゝ、面も揚げず、其処に平伏」し、「お手打」を嘆願する。与四郎の豹変ぶりは異様である。「枕を並べて覚悟の自殺を遂げ」る浅水与四郎夫婦の行動は、滑稽を通り越しまさに悲劇である。このことで、封建主義が君主に仕える人々を不幸にした姿を、一層強く表すのである。つまり、悲劇を作り

出した原因は、家臣にも主君にもなく、封建制の構造にあることも菊池はいいかつたようである。

菊池が造型した家臣たちは、行動や画一性に滑稽さが漂う人物である。その滑稽は、割腹という封建的な行為で極に達し、そこから変化する。割腹の経緯が、しだいに家臣に非のない理由になって畳みかけてくることで、悲惨さを帯びてくる。最後には、家臣の愚かなイメージよりも、切腹という最も封建主義的な行為の凄惨さを示すことで、封建的な人間関係への痛烈な批判としているのである。逆にいえば、このような形で家臣の人物造型には、封建主義が人を不幸にした事実が込められているのである。

三

菊池が描く主人公・忠直はどういう人物であろうか。

忠直は、大阪城攻めに「無二無三に」軍勢を押し進め、軍令の出るのを待たず突進する。越前勢が「楔の如く喰ひ入つて行くのを見」て、「他愛のない児童のやうに鞍壺に躍り上がつて欣」ぶのである。そして、青木新兵衛一番乗りの注進に「相好を崩」しながら、五千石の加増を伝えるべく「狂気の如くに叫」ぶ。家康から「日本樊噲」という称号をもって功を讃められると「一本気

な」忠直は「涙が出るほど嬉し」くなる。

城攻め場面での忠直は、無邪気で快活、勇壮な君主として描かれる。冒頭での人となりの説明で、幼主であることを強調した点と通じている。軍令に耳を傾けず、他藩への配慮などは顧みない点は、破天荒な人物でもある。しかし、先駆けの家老を配置し、「三万に近い大軍を、十六段に分け」て進軍させ、国老が彼の意のままに戦うこと等、智術にたけ凡庸な人物ではない。

内面的な忠直像は、外見のニュアンスとも違っている。家臣には「優越感情」を持つてきた一方で、大阪出陣時には、次のように考えていた。

功名を競ふ相手は、自分と同格な諸大名であるので、若しや自分が彼等の何人かに劣つて居はしまいか、殊に武将としては最も本質的な職務たる戦争に於て、思はざる不覚を取りはしまいか（略）

忠直は、諸大名に対し「同格」と形の上では、冷静に判断できる。そして、能力の比較を始めると「劣つては居はしまいか」と劣等感を持つことへの不安を抱く。さらに、自分自身の「本質的な職務たる戦争」に対する能力の絶対的な不足への危惧に、思ひ及ぶ。冷静に自分と周りの者とを比較判断し、内省を重ねる思慮深い人間がいる。

城攻め後の思いも同様である。まず、実際の戦果を挙げ、次に諸家の軍勢との比較、さらに叔父にあたる義直卿、頼宣卿、越後侍従忠輝卿の不首尾や伊達、前田、黒田といった大藩の勲功と比較した上で、「百に近い大名の中、功名自分に及ぶ者は一人もない」という判断を下すのである。戦いの後、このような回想によって「晴々とした心持」「天下第一人と云つたやうな誇り」「揚々とした心持」を抱く忠直の姿に、軽佻浮薄のイメージは起こらない。内面的には、状況判断のできる沈着な人間として描かれているのである。

外面的な無邪気、勇猛果敢さも、沈着冷静、分析力ある性格も、暴君たる姿とは無縁である。むしろ感情豊かな人物として描かれている。先に見た家臣たちの滑稽なふるまいによって、忠直は相対的により本来の人間味あふれる人物に見えていく。逆に、忠直の姿が家臣たちの封建制に縛られた行動を浮き彫りにする効果ももたせている。

菊池のこのような人間的な忠直の造型が、さらに近代人的な態度の描写につながっていく。家臣二人の噂話を立ち聞きする場面である。

家臣の偽らざる本心に「激怒に近い感情」を覚えるものの、思慮深い忠直は、すぐ激怒の中核に「癒しがたい淋しさの空虚」を

感じる。その淋しさが、「臣下から偽りの勝利を媚びられて得意になつて居た自分が浅ましい」という人間としての疎外感であることを忠直は知る。同時に「今兩人を手刃して、その浅ましい事実を、自分が知つて居ると云ふ事を、家中の者に知らせるのも」「可なり苦痛」であつた。ここには、一見封建君主としての体面を重んじる忠直が描かれる。手刃を躊躇するのは、体面という主君にありがちな意識である。しかし、その体面の中身は、疎外感を感じる自分の存在を知られたくないという、きわめて生身の個人的な考えである。忠直にとつて、家臣たちは「偽りの勝利」を媚びられて得意になることが「浅ましい事実」と認識できるような人間である。つまり、忠直は家臣たちを、偽りの勝利に得意になることが「浅ましい」と感じるこののできる、自分と同じレベルの知的な人間と捉えていたのである。

菊池の、忠直の造型は、苦悶する人間に重点を置いていく。再度の真槍大仕合を企てた理由を次のように思う。

真槍で立ち向ふならば、彼等も無下に負けはしまい、秘術を尽くして立ち向ふに違ひない、さすれば自分の真の力量も判る。若しその為に、自分が手を負ふ事があつても、偽りの勝利に狂喜して居るよりも、何れ程気持がよいか知れぬ。(略)
忠直の推理は、相手を対等の人間と見たときの論理である。人

間としての疎外を感じながら、その克服のために煩悶し、人間同士の対決を望んで自分と戦う人物である。しかし、家臣にとつて、忠直自身の君主としての存在が絶対であること、君主の前には、家臣は何の疑いもなく命を捨て、「秘術を尽くして立ち向ふ」ことなどないことを、忠直は理解しない。まして「自分が手を負ふ事」が、不可能であることがわからない。忠直の苦惱は、封建君主の苦惱ではない。人間として客観的な眼を忠直に持たせた菊池であったが、忠直の封建君主としての意識は、無意識のうちに追いやつてゐる。

そのことが、明らかになるのが、大島左太夫が真槍を持つて臨んだ時の忠直の言葉である。

「夫でこそ忠直の家臣ぢや。主と思ふな、隙があれば、遠慮致さず突け！」

君主と家臣としての対決を避けるがための局面でこの言葉が飛び出す。緊迫した状況の中で、思わず出た言葉だが、家臣としての行動を讃め、すぐ主君と思うなと言いつつ。忠直は、己の自家撞着に気づかない。忠直の中では矛盾していないといった方がいいかもしれない。主君に忠誠を尽くす家臣ではなく、平生、闊達で豪快な自分の身内であることへの称讃である。自分の意を汲む人物とともにする己自身への納得でもある。主君に従属する家臣

という面ではなく、左太夫の勇敢な性向を讃めたという意味では、家老が死諫を「臣下としての本分」とする考えとは、質が違う。人間同士の戦いを求めることに必死な結果、忠直の封建君主としての意識は、無意識なものとなつてゐる。すべて菊池の造型であり、封建君主の悲劇を直接描こうとしていないことがわかる。

同様に、分別ある忠直は、次のように思う。

自分と彼等との間には、虚偽の膜が、かゝつて居る。その膜を、その偽の膜を彼等は必死になつて支へて居るのだ。その偽は、浮ついた偽でなく、必死の懸命の偽である。

真槍の大仕合の後、忠直は家臣の心が自分との関係に介在している「虚偽の膜」を支えていることを悟る。しかし、その「必死の懸命の膜」は、家臣にとつては努力によるものではない。疑いもなく当然の忠誠心から起こつたものである。そのことを忠直は失念している。

自分の周囲の者のうち愛妾の淋しさに気づいた忠直は、もう一歩踏み込んで理解しようとする。愛妾を「権力者の歓心を得よう」と云ふ「自我の備つた人物とみて、「身を委して」「傀儡のやうに扱はれて」主体性を失い、環境に挫折感を持った状況をつかむ。主従関係とは、一種異なる従属関係である状況を把握するのだが、やはりそれを明確に認識できず忠直自身の疎外感と同根の

ものだとも察知しない。「友情の代わりに」服従を受ける家臣たちと同様、「恋愛の代用として」忠直一個人の服従を受ける被害者としての同情になつていく。

こと自分自身の状況に対しては、「自分一人、膜の彼方に、取残されて居」ながら「多くの人間を支配して居る」という。忠直の認識する「支配」は、「人間として人情の代わりに」服従を提供している家臣の立場と、対比させるような形で、忠直の頭に浮かぶ。忠直の側からいうと、人情の代わりに支配を強いるという状況を把握しているのである。「絶対な権力」が引き起こす関係であることには、終始気がついていない。たどり着いた先は、「人情の世界から一段高い処に、放り上げられ」「中央に在りながら、察莫たる孤独を感じて居る」人間・忠直である。

菊池は、あくまで人間らしい生き方を模索し、自分自身のうちに問いかけて向かつていく人物を強調する。すなわち、封建制度の中で生きる者の悲劇、封建制の愚かしさを託した家臣たちの造型とは、まったく異なる筆致を忠直の造型に課しているということである。人間の疎外感・葛藤、人との関係性の問題を追求しているかのような態度である。忠直へのそうした問題意識の投影を強めるために、この間の家臣・愛妾等、周囲の忠直に対する心理は、前半の城攻め部分とは一転して、極力抑えられている。わずかに

老家老、小山丹後の「不当な仕打に対する怒」だけが、表されている。

唯一、忠直と家臣の心情がぶつかり合うのが、浅水与四郎との対峙場面である。この場面を、忠直の側からもう一度見ておきたい。

忠直は、人間らしい反抗を示す与四郎に面し、「自分が人間として他の人間に対して居るやうに思」う。その一方で、決死の覚悟で飛びかかってきた与四郎を取り押さえると、「与四郎！ 遣に其方は武士ぢやのう。」という。忠直は、本気で刺そうと「飛燕の如く身を躍らせて」飛びかかってきた与四郎の行動に、勇猛な者としての讚美を込めて、先のことばを洩らしているのである。家臣たちが、死諫のため割腹した者に投げかけた「遣は武士ぢや」とは、意味合いがまったく違ふ。潔く死んだ者は、主君に仕える家来としての分をわきまえた行動が、家臣たちに讃えられた。つまり、奉公の精神を体現した者としての称讃が込められていた。しかし、忠直にとっては、封建君主としての権力者の意識も無意識のものであったが、武士であることにも無意識で、疑問の余地はない。忠直は、最後まで「主従の境」にある「膜」を意識しながら、封建君主の権力への疑い、武士であることへの階級への疑問、さらに封建制の主従関係自体の愚かしさには、覚醒しなかった。

忠直に、人間的苦悩を託した菊池にしてみれば、封建社会への懷疑、武士であることの疑問に目覚める忠直を描けば、より近代人として造型できたはずである。しかし、それを極力避けたところに、菊池の積極的な意図があった。つまり、「封建思想の打破」というテーマを、忠直自身に背負わせることを避けたのである。「忠直卿」の主たるテーマが「封建思想の打破」にあるならば、そうする必要はなかった。これまで権力・階級・体制を意識せずに、個人主義に目覚めた巧妙な描き方で、人生の苦悶と闘う忠直の姿を表そうとしたのは、菊池にとつて人間の正しい生き方への問題提起に主眼があつたからである。ただ、そこには、より近代人として造型しようとするれば、かえつて封建主義が前面に出てきってしまうというジレンマもあつたわけである。その点からすれば、忠直像は巧妙ではありながら、両者の微妙な均衡の上に成り立つ産物であり、見てきたように菊池はその造型に少なからず苦心している。

四

しめくくり、菊池は次のように記す。

忠直卿が、かゝる残虐を敢てしたのは、多分臣下が忠直卿を

人間扱ひにしないので、忠直卿の方でも、おしまひに臣下を人間扱ひにしなくなつたのかも知れない。

菊池が、自身で書いた解説のように、この説明も一見、君主の「人間生活をゆがめていた事実」を指摘しているように思える。ただ、臣下は忠直卿を人間扱いにしなかつたのではなくて、できなかった、人間扱いという概念すら浮かんでいなかったのである。もちろん、菊池もそのことを描こうとしたのは、明らかである。飄々とした語り口の中には、「臣下」という語の奥にある封建主義への痛烈な揶揄が込められているといつていい。

また、この言を待つまでもなく、忠直を見る目は好意的である。そして与四郎夫婦の「覚悟の自殺」以後の忠直の話は、伝聞の形で終えられている。改易、出家後の忠直の発言は間接的な形で描かれる。

生々世々国主大名などに再びとは生れまじきぞ。多勢の中に交じりながら、孤独地獄にも陥ちたらんが如き苦難を受くる事屢々なりなど仰せられ（略）

近代人の人間の苦悩を好意的に忠直に込めた菊池にすれば、この結末部分は、なくてはならない箇所である。人間疎外からの脱出は、個人主義を意識する近代的な人間にとつて、大きなテーマであり、人間の強さを示す事柄といえるからである。忠直は国主

大名などに決して生れない、という強い身分への後悔を吐露する。けれども、それは封建制への意識ではなく「孤独地獄」のような心の苦しみ、疎外感を味わうからである。忠直は、あくまで人間関係を最悪の状態にしてしまふ立場を忌み嫌っている。

そして最後に、出家後の生活も伝聞の形で描かれる。

『(略)……徒然の折には、村年寄僧侶などさへお手近く召し寄せられ、囲棋のお遊びなどあり、打ち興せさせ給ふ有様、(略)殊に津守の浄建寺の洗山老衲とは、いと入懇に渡らせられ、老衲が、「六十七万石も持たせ給へば、誰も紂王の真似なども致したくなるものぞ。殿の悪しきに非ず。」など、聞え上げけるに、お怒りの様もなく笑はせ給ふ。末には百姓町人の賤しきをさへお目通りに引き給ひ、無礼に飾なく申し上ぐる事を、いと興がらせ給へり。御身はよろづ、お慎み深く、近侍の者を憫み、領民を愛撫し給ふ有様、六十七万石の家国を失ひたる無法人とも見えずと人々不審しく思ふ事今に止まず候』と、あつた。

立場、地位、人間関係が変われば、むしろ人格の優れた情緒豊かな忠直がいる。快活で遊び笑い、気さくで慎み深く、思いやりのある姿である。まさに温かい人間味あふれる人物である。老衲のことばには、六十七万石という地位、周囲を支配し得る人間関

係の中にいれば、誰でも常軌を逸した行動をとってしまう人間の危うさが代弁されている。菊池は、老衲の言を借りて不安定な人間関係が個人を変えてしまうことをいい、忠直が弱い人間、不完全な人間であることをここでも否定しているのである。

また、忠直は、地位も身分も特殊な人間関係も存しない状況の中で、再び人と人の付き合いの中から自立していく。周囲の人々との関係で苦悶し、その人間関係から自己を見失っていた忠直であるが、全くの人間不信に陥ったわけではない。状況が変われば、また身近な人間関係から生来の快活な温かみのある性格を取り戻し、強く生きていく健常な人間である。菊池は、自力で立ち直る忠直の姿で、再生していく強い人間を肯定している。

以上見てきたように、忠直と周囲の人々との人物造型に、菊池が意図したそれぞれのテーマが、使い分けられながら託されているといつていいだろう。家臣たちが、自我を持たず行動する愚かしさを描き、さらには愚かしい家臣に悲哀の目を向けることで奥にある封建主義自体の不毛さを指摘した。一方で、忠直には、暴君のイメージを始めから持たさないようにして、近代的な自我を持つ人物として造型しながら、家臣との違いを浮き彫りにし、人間の苦悩を強調していった。しかも封建君主や武士としての意識も、無意識のものとして処理し、近代人の造型を適度に保ちつつ

人間疎外という、より近代的な問題に主たるテーマを絞りこんでいった。革新的な近代人として封建制のさまざまな矛盾に目覚める忠直に、筆を尽くせば、家臣たちに託したテーマと同じ、因襲打破一辺倒の厚みのない作品になってしまったはずである。封建思想の打破を自覚する存在になることを避けるために、忠直の近代的な眼も、微妙に抑制された。そして、最後に本来の感情豊かな人間として強く生きていく忠直を示すことで、近代人の苦悩が解決される姿を菊池なりに提示したのである。

五

見てきたように忠直の造型意図が、菊池の「忠直卿」発表時の、史実に拠っていないという強硬な発言の裏付けになっていたことが、わかる。また、その意図の消化に苦勞した忠直像のジレンマが、「十分書けていない」という反省の弁につながっている。それに対して、当時の評はいずれにしても歴史小説という範疇のなかでの印象批評に終わっており、「忠直卿」で意欲的に菊池の取り組んだ意図は顧みられていない。作品の反省やテーマそのもの以上にことさら作品の発想を訴えた理由もうなずける。定評はもちろん、作品から三十年近く経過した晩年の菊池の発言によって、

テーマを決めつけるのは早計である。

今日でも、「忠直卿」は「エゴイズムの徹底的な解剖」の「ピク」^①とか、あるいは「途中までは幻滅の過程を経る」が「人間の弱さや不完全さを肯定」する点に「救いのある作品」^②という評価がなされている。エゴイズムや幻滅の解剖に努めたのであれば、菊池の眼は冷徹なものであったはずである。

しかし、作品中、冷徹な眼差しはどこにも向けられていない。家臣の滑稽さの揶揄にしても、封建制の犠牲者への哀れみの布石である。忠直にいたっては、はじめから温かい眼で、健全な人間として描き、自らの力で疎外の実態を見極め、生き直していく姿を穏やかに示している。また、忠直の再生する姿を見届けようとする菊池の姿勢は、人間の弱さや不完全さを許容してはいない、といえる。

このことは、菊池が現実のみを冷ややかに見つめる態度から完全に脱し、健全な感覚で人間を見つめていたからにはかならない。大正六年一月の戯曲「父帰る」で示された、個人主義と人間味との調和意は、歴史上の人物を題材にした小説では、「蘭学事始」(『中央公論』大正十年一月)「入れ札」(『中央公論』大正十二年二月)「俊寛」(『改造』大正十年十月)といった作品において、さらに推し進められていくことになる。

ていったと思われる。

註① 「暴君の心理」からの改変の特徴については、片山宏行

「『忠直卿行状記』の成立——『暴君の心理』をふまえて——」（『青山語文』第一二号、昭和五七年三月）に詳しい。

② 青野季吉「菊池寛論」（『新潮』第三一年第七号、昭和九年七月）。のち『現代日本文学全集』二七（筑摩書房、昭和三年八月）所収。菊池の「常識的」解釈の作品の背景に、「進歩的近代的インテリゲンチヤ」と「封建性を脱却しきらぬ小市民」との特質を合わせ持つ「小市民的存在」の菊池をみる。

③ 平野謙「菊池寛——人と文学——」（『現代文学大系』二八『菊池寛・広津和郎集』筑摩書房、昭和四二年五月）。のち『平野謙全集』第六卷（新潮社、昭和四九年一月）に収む。『さまざま青春』（講談社文芸文庫、平成三年九月）に再録。平野は、菊池にとって、「史実は二種の枠組み」という。ほか紅野敏郎「松平忠直菊池寛『忠直卿行状記』」（『国文学』解釈と教材の研究』第一九卷第四号、昭和四九年三月）にも同様の指摘がある。

④ 本間久雄「新秋文壇の収穫（三）——二つの新しい歴史

また、いわゆる「啓吉物」と呼ばれる現代を素材にした小説の世界でも「忠直卿」前後の、「盗みをしたN」（『新小説』大正七年五月）、「父の模型」（『新潮』大正七年十月）、「愛嬌者」（『文章俱樂部』大正七年十一月）、「青木の出京」（『中央公論』大正七年十一月）といった作品に窺われる。特に、菊池の人間を見る態度の寛容さ、温かい人間性を持つ人物の描写は、この「忠直卿行状記」で確立したといつてもいい。個人主義・合理主義を讃えつつ、社会と適応しながら生きること理想をみる、ヒューマニスティックな態度が、すでにこの時の菊池には備わっていたのである。

制度的な因襲打破に向かわないことが菊池の限界とされ、
「人間性をおるがままに肯定する」「懐疑を知らぬ常識哲学に終始」したとする批判は今も根強い。しかし、菊池は自由闊達な忠直の人間性を、そのまま受容してはいない。人間の自我の問題に焦点を絞りながらも、エゴイズムをそのまま讃美せず、段階を踏まえた人間性の把握をおこなう。尖鋭的な合理主義態度に陥らず、しかも人間を醜悪な自我を持った存在とみない温かい眼があつたがゆえ、「忠直卿行状記」は、因襲打破の姿勢と歴史を逆用した近代的な人間味とが調和した作品となり、以後のいわゆる「歴史物」や「啓吉物」とよばれる独特の作品群につながつ

小説——」（『時事新報』大正七年九月六日付夕刊）。

⑤ 長田秀雄「九月の創作の内から（三）」（『読売新聞』大正七年九月七日付朝刊）。

⑥ 加藤武雄「歴史小説に就て」（『新潮』第二九卷第四号、大正七年一〇月。「文壇偶語」の内）。

⑦ 菊池寛「自信がなくて意外にも高評であつた『忠直卿行状記』」（『新潮』第三〇卷第一号、大正八年一月。「出世作を出すまで 新進十二家の感想」の内）。「沢山書いた年」（『新潮』第二九卷第六号、大正七年一二月。「本年発表せる創作に就て」の内）において、菊池はすでに「作者たる僕は余り自信はありませんでした。」と述べている。

⑧ ⑦に同じ。

⑨ 菊池寛「歴史小説論（四）歴史小説の第二の場合」（『文芸講座』文芸春秋社、大正一三年一〇月）。引用は、『菊池寛全集』第二二卷（高松市／菊池寛記念館刊、平成七年一〇月）に拠る。

⑩ 吉川英治「解説」（菊池寛『忠直卿行状記』新潮文庫、昭和二年三月）。のち『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』（新潮文庫、昭和四五年三月）に収む。

⑪ 片山宏行「菊池寛・ロマンチストの変貌——京都時代の考

察を中心に——」（『青山語文』第一八号、昭和六三年三月）。

⑫ 片山宏行「菊池寛『恩讐の彼方に』をめぐって——その成立および性格——」（岡保生編『近代文藝新攷』新典社、平成三年三月）。

⑬ 江口渙「わが文学半生記（四）——その頃の菊池寛——」（『新日本文学』第七卷第一〇号、昭和二七年一〇月）に指摘される。のち『わが文学半生記』（青木書店、昭和二八年七月）に収む。『近代作家研究叢書』六四（日本図書センター、平成元年一〇月）に再録。講談社文芸文庫（平成七年一月）に収む。いずれも同題。

⑭ ⑬に同じ。また、宮本百合子「歴史文学について——鷗外・芥川・菊池そのほか——」（『古典研究』昭和一五年六月。のち「鷗外・芥川・菊池の歴史小説」と改題、『宮本百合子全集』第一一巻・新日本出版社・昭和五五年一月所収）にも同様の指摘がある。

⑮ 瀬沼茂樹『大正文学史』（講談社、昭和六〇年九月。二二二頁、第二章「個人主義文学（二）新思潮派の人たち」の内）。